

現代社会の理不尽に振り回されず“毅然とした人物”になるために！<その1>

修身の基本修得・大学(古本)編

上司から信用、部下から信頼される人物の入門書“大学”を学ぶべし！

徳川時代における身分制度(士農工商)において、『武士』を人民(農工商)の最上位に据えましたが、これはただ据えたわけではなく、人民の最上位たる『武士』に人としての高い精神性(道徳性)を求め、『武士』に『武士道』を定着させました。

その『武士たち』で、『大学や論語』を読まない『武士』はいなかったのです。『大学や論語』は、いわば“武士の必読書”でもあったのです。

戦後の日本は、人としての付属的要素である『知識や知能』『技術や技能』の教育を一層強化し、習得させることで大きく復興できたと言えます。

しかしながら、今日の日本の“大企業のデータ改ざん問題”、行政(官僚)の“障害者雇用の水増し問題”、スポーツ界の“団体不祥事”など、これらの不祥事の根本原因は、技術的な問題ではなく、人としての本質的要素である『道徳性(修身や徳性を磨くこと)』が欠落した組織のトップや、その部下たる管理職者が引き起こしています。

このような中で、次の時代を担うべき世代の“声なき声”は、世の中の様々な“理不尽”を感じながらも、それに振り回されることなく“毅然とした判断と対応”ができるようにしたいことにあります。

そのためには、『修身』が必要であり、その最初が『論語』の前に『大学』を学ぶことに尽きます。

<学問(修身)の3段階レベル>

第1段階は、自身の労働力としての学問。

より多くの収入(給与)と引換えるために、人の付属的要素(知識や技術)の“習得レベル”。

第2段階は、自身の人生を豊かにするための学問。

学問を単なる知識習得の段階で捉えるのではなく、その学問の“根本原理を修得(応用)”して、自身の日常生活を豊かにしようとする“修身レベル”。

さらに上の第3段階は、世の中をより豊かにするための学問。

このレベルになると、『治国』『平天下』に基づいて学ぶため、学問が進むに応じて、学ぶ者の品性も“大人レベル”に自然と向上する。

しかしながら、『知識や知能』『技術や技能』を教えることに終始した学校教育において、教えてもらうことが“学ぶ”ことだという思考パターンに若い世代が慣らされてしまいました。

その結果、自身で考える本来の“学ぶ”ことをとても苦手にしてしまっています。

徳川時代の『武士』の教育においては、7歳～8歳頃より『素読』『講義』『会読()』の3つの学習形態で行っており、現代の教育においては、この『会読』が完全に抜けてしまっています。

数人で同じ書物を読み合い、その内容や意味を論じ合い、自身の言葉で他の人にも説明すること。

『大学』の修得においては、この『会読』を行うことで、本来の“学ぶ”ことを思考パターンとして定着させて、『大学』を通して“毅然とした人物”の階段を上ることを目的に開催しています。

大学の三綱領(三つの柱)

明德を明らかにするにあり

『徳』とは、本来、人間が持っている良いところのこと。「世の中に良い影響を与える立派な人物」、つまり“^{たいじん}大人”になるための道の第一歩は、自身がこの『徳』を表に現すこと。これが一番最初。民に親しむにあり

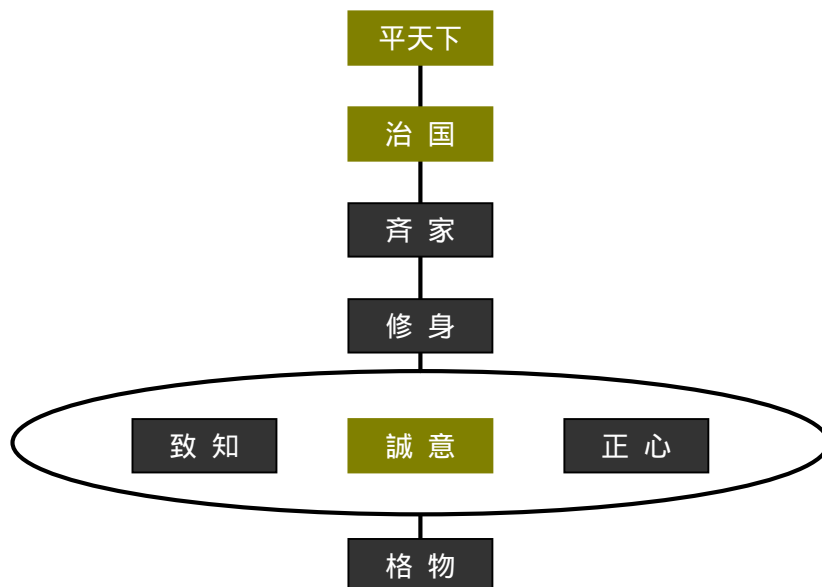
『明德を明らかにした人』は、それを自分だけのものにするのではなく、周りの人たちに、どんどん伝えて行きなさい、ということ。

至然(しぜん)に止(とど)まるにあり

『至』とは、他とは比べようもないくらい「(高峰の)トップ」であること。『至善に止まる』とは、高峰の最高位の良い状態を維持しなさい。または、さらに高めていきなさい、ということ。

『人が本来持つ良いところ』を発揮して、それを『周りに伝える』ということを繰り返し、その最高の状態を目指して、『それを維持しなさい』ということ。

大学の三綱領に対する細目(八条目)



修身の基本修得・大学(古本)編の要項

開催	平日コース：3時間×3回		
定員	少人数制	事前必読資料をお渡しします。	
費用	5万円/名(税別・資料代含む)	個人負担割引制度があります。	

万世に通ずる会社の“根本土台”を創る

企業100年計画 株式会社